源氏物語の新研究

文學士 手塚 昇 著

東京帝國大學國文學研究室編輯

國文學研究叢書第四編

大正十五年二月二日印刷
大正十五年二月五日發行

源氏物語の新研究

定價金參圓參拾錢

著者　手塚昇

發行者　東京市赤坂區傳馬町三丁目十番地　佐藤正叟

印刷者　東京市京橋區弓町二十五番地　高橋郁

發行所　東京市赤坂區傳馬町三丁目十番地
振替東京二九五〇七番
至文堂
電話青山（長）三五四六番
四三四三番

（三協印刷株式會社印刷）

序詞

一、本書は嘗て國文科の卒業論文として呈出したものを取捨し、訂正を加へたものであつて、その一部分は既に國語と國文學創刊號以來數回に發表した事のあるものであるが、最初公表を目的としたものでなかつたので、先人諸家に對しても、隨分忌憚なき批評を加へた所が少くない。今なほ先人諸家に對して敬意を失するやうな言葉があつたら、それは決して著者の本旨でなく、本書の最初の性質から來てゐる事を御諒察あづかりたい。

一、本書は人に紹介することを目的とする以上に、自己を養ふ爲めに、この傑作の中から何物かを得たい考から研究したものである。從つて言ふまでもないやうな事ではあるが、自分は先人が何う考

へたかを知る前に、先づ自分が何う思ふか、即ち自己の印象を中心として、然る後に先人諸家の意見を研べるの順序、態度を取つたものである。

一、議論の進行上、幾度か同一論を繰返した所が少くない。讀者諸家のなるべくよく自分の考を理解していたゞきたいと思ふ考からである。

一、本書が公けにされるに至つたのは、一に藤村先生の御骨折による。厚く感謝する所である。

大正十五年一月　　手塚昇

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

目次

一、序論……一
二、時代の概觀……七
1. 政權の推移……七
2. 公卿有閑の理……八
3. 戀愛の悲劇葛藤時代……一一
4. 京都と地方……一三
5. 奈良と宇治……一四
6. 建築と衣裝……一五
7. 遊藝……一七

8. 風習……一八
9. 外來文化……二三
a 佛教……二三
b 支那文學……二五
10 上代以來の國文學……二七
三、源氏物語の作者に就て……二九
四、紫式部……三二
1. 經歷の輪廓……三二
2. 道長と式部……三七
3. 式部の容姿……五一
4. 式部の性格……五六
5. 式部の系圖……六九

6. 紫式部日記に就て……七一
五、源氏物語著作の時期……七三
六、源氏著作期と更級日記……一〇四
七、前代文學の影響……一一八
1. 伊勢物語の影響……一一九
2. うつぼ物語の影響……一二四
3. 落窪物語の影響……一二四
4. その他……一二六
八、紫式部の抱負……一二九
九、源氏物語のモデル……一四五
1. 諸説の大勢……一四五

2. モデルの有無……一五三
3. 從來のモデル研究失敗の原因……一五六
4. 源氏物語前半のモデル……一六〇
a. 初期のモデル村上帝……一六七
b. 光源氏前期のモデル伊周……一六九
c. 弘徽殿と東三條院詮子……一七一
d. 藤壺後の薄雲女院と皇后定子……一七二
e. 頭の中將と隆家……一七六
5. 後半澪標以後のモデル……一七八
a. 光源氏の後半と道長……一八二
b. 紫の上と紫式部……一九五
c. 葵の兄頭中將と隆家、公任……一九九
d. 夕霧と頼通、敦通……二〇四

e. 玉鬘と道長の高松殿……二〇九
f. 宇治拾帖の八宮と伊周……二一〇
6. 類似の人物……二一三
a. 玉鬘と浮舟……二一三
b. 末摘花と近江君……二一七
c. 軒端の萩と源内侍……二一八
7. 結論……二一九
8. 源氏物語か藤氏物語か……二二一
十、主要人名に關する臆說……二二三
十一、源氏物語の梗概及び研究書に就て……二二三
1. その梗概に就て……二二三
2. 諸本の異同に就て……二二五

3. その研究書に就て……二三六
十二、古來の源氏評論の大勢……二四一
1. 紫家七論まで……二四八
2. 紫家七論……二四八
3. 玉の小櫛……二五四
4. 源氏物語評釋……二六七
5. 國文學全史平安朝篇……二七八
十三、評論に就て……二八七
十四、形式方面の研究論評……二九八
1. 源氏物語の結構……二九八
a. 物語の名稱……二九八
b. 卷數と正續……二九九

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

c. 串刺式繼穗式文學……三〇四
d. 和歌入の文學……三一〇
e. 部分的和歌織込……三一三
2. 偉大なる理想の試み……三一五
a. 多數の人物……三一五
b. 官位昇進と人物の代名詞……三一七
c. 編年體的物語……三一三
3. 寫實小說か理想小說か……三一八
4. 技巧修辭……三二七
5. 女性的長所短所……三四四
a. 長所方面……三四四
b. 短所方面……三四七
6. その文章……三五一

a. その一……二六三
b. その二……二六四
c. その三……二六五
d. その四……二六六
e. その五……二六七
f. その六……二六七

十五、內容方面の研究論評……二六九

1. 創作の經過……二六九
2. 著しい歷史的色彩……二七四
3. 靈肉鬪爭の藝術……二八〇
4. 女性觀と理想の男女……二八七
5. 傑れたる心理描寫……二九四

十六、結　論……三九七
1　結　論……三九七
2　源氏物語の世界的置位……四一七

目次終

源氏物語の新研究

一、序論

源氏物語一度出でゝ以來こゝに九百年、世々の學者達は何れも註釋に註釋を加へ、批評に批評を重ね來つて、今日に至つては汗牛充棟といふ言葉も到底その形容語とするに足りない有樣である。從つてその所見も儒者、佛者、國學者等種々雜多であつて、各その立場々々から解釋を異にしては居るが、非常に一般の注意を呼んだ大作である事は勿論、花鳥余情の如きは「わが國の至寶は源氏の物語にすぎたるはなかるべし」と言ひ、本居翁の如きも「大方先にも後に

もたぐひなし」とまで言つてゐる位で、非常な傑作と見てゐた事は何れもほゞ一致してゐる。

けれども彼等の多くは正しい文學批評家ではなく、甚だしい偏見に捕はれてゐるものが少くなかつた。ひとり明治以前に於てのみならず、明治以後に至つても源氏物語が非常に尨大にして且つ難解な作品であるが故に、語句の註釋を專とする語學者は作全體の結構、藝術的價値に論及する者少なく、よくその評論に着目して藝術を論ずる者は、やゝもすれば空想に奔り、着實正確に研究するの氣力乏しく、又國文學に通曉する者は泰西の藝術を解する者少なく、泰西の藝術を解する者は國文學に詳しからず、加ふるに日毎に吹き募る生活難の嵐は、これを望む篤學の士あるも、心靜かに研究論評するの暇を與へず次から次へと現れ出るものは、多くはその日暮式の間に合せ物で、多少權威あ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.